

アメリカによるハイフォン港の機雷封鎖という耳目聳動戦術の直後であっただけに、ニクソン訪ソが果たして実現するかどうか、一部には危ぶむむきもあつたが、米ソ会談はさる五月二十二日から三十日まで、まさにトントン拍子に進展し、弾道弾迎撃ミサイル(ABM)制限条約、戦略攻撃兵器制限協定、宇宙開発協力協定、科学・技術協力協定など一条約、六協定、一取り決めが合意に達し、注目の米ソ共同声明と米ソ関係の基本的諸原則にかんする文書が発表さ

### ● 外交時評

## 米ソ会談の意味

中嶋嶺雄 (東京外語大学助教授)

れた。

それらの内容は、米ソ両国の当面の利害にとつてもきわめて重要なものばかりであり、今回の米ソ会談をふりかえってみると、これほどの必要課題が山積していた以上、米ソ会談は開かれるべくして開かれたの感を深くする。ベトナム戦争の余燼によつて、米ソ双方の直接的利益を犠牲にしたくないという論理がやはり最優先したのであろう。

このように、米ソ会談はきわめて実利主義的なりアリティをもつたものであり、さる二月

の米中会談とその共同コミュニケが、歴史的意義の大きさにもかかわらず、内容的にはきわめて抽象性の高いものであり、双方の原則と妥協点の確認といった色彩が強かったのにくらべ、きわめて対照的だったといえよう。そして、米中ソ三極構造とか、政治的多極化とはいいなから、世界の現実の力関係は、その実勢においては、依然として米ソの二極に収斂していることを、改めて想起させた。

さらに今回の米中会談がベトナム戦争や中東



戦争については、直接には具体的な解決策を見

いだせなかつたにもかかわらず、米ソ間関係では大きな成果を収め、また米ソ共同コミュニケの国際問題にかんする部分が、まずヨーロッパ問題から説き起こされていることから示されるように、米ソ双方にとつて、第一位の優先順位として考えなければならぬ問題は、アジアの問題ではなくてヨーロッパの問題であることを、明らかに見せつけたのであった。

この点で、米ソ会談に先立って、西ドイツとソ連、ポーランドとの東方条約が成立したこと

は、ヨーロッパの安定ということからして、米ソ双方にとつてきわめて有益であったといえよう。ヨーロッパの安定によつてこそ、ソ連は、優先順位としては第二位ながら、中ソ対立がからんで多角的な軍事・外交戦略を必要とするアジア問題に、より以上の力を注ぐことができるし、アメリカもまた、本来、優先順位が低いはずのアジア問題にコミットしすぎたどろ沼状況から、一日もはやく足を洗うことができるのである。

そこで、アジアの大国としての中国の出兵が改めて問題になるが、本来ならベトナム戦争再激化のさなかの米ソ会談を、そしてとくにニクソン訪ソを受け入れたソ連「社会帝国主義」を激しく非難することによつて、その国際的影響力を高めうるはずの中国も、今回ばかりは、どうもバツとしなかつた。いうまでもなく、中国自身、すでにニクソン大統領一行を迎えての華麗な宴のあとであり、米中会談を不満に思つた北ベトナムの四月攻勢の結果としてのベトナム戦争再激化という状況のあとであつたからである。

いずれにせよ、米中会談、米ソ会談と二ラウソンドのショーをおわつた米中ソ大国外交は、ついにベトナム戦争の解決策を即時的には見いだせず、当面なお時間を必要とすることになり、一方、インドシナは再びどろ沼の雨期を迎えることとなつた。